はじめに

発達とは何か？

学生時代に「発達」に出会ってから20年以上、ほそぼそながらも発達にかかわる仕事をしてきましたが、あらためて答えようとするとなかなか難しい問いです。

最初は素朴に「発達とは、できなかったことができるようになることだ」と考えていたように思います。でも実践現場でさまざまな子どもたちや実践者の方々と出会う中で、また、重みのある豊かな理論や実践報告にふれる中で、次第に考えが変化してきました。そもそも「できる―できない」ってどういうことだろう？　個人の発達には、まわりの人との関係や実践そのものの発達が深く関係しているのではないだろうか？　…などなど。いろいろな人たちに刺激を受けながらいまだに考え続けています。

ですから発達について書いてみないかと声をかけていただいたとき、発達とは何かについてまだ確固とした自分なりの答えがないのに引き受けてよいものだろうかと迷いました。しかし、いまの時点でぐちゃぐちゃしている考えを整理してみるのもよいではないか、書いていく中で新たに見えてくるものもあるかもしれないと思い直し、

お引き受けすることにしました。

この本は二人の先達の思想と理論が土台あるいは背骨となっています。一つは、学恩を受けた田中昌人先生（1932－2005年）の「可逆操作の高次化における階層－段階理論」。もう一つはロシアの心理学者レフ・セミョノヴィチ・ヴィゴツキー（1896－1934年）の発達論です。生きた時代も文化的背景もちがうけれども、両者には共通することがいくつかあり、そこに私は魅力を感じています。

まず、発達を教育と切り離さず、つねに発達と教育の関係を視野に入れている点。教育とは他者を介して新しい自分や新しい世界との出会いを助ける営みです。教育こそが発達を導くのだという視点は、個の発達のみならず、集団の発達や実践自体の発達にも目を向けさせてくれます。

そして、障害のある子どもの発達を何か特殊なものと考えるのではなく、その中にこそ人間の発達の普遍性を見いだそうとする点。田中先生もヴィゴツキーも実際に障害のある子どもとつき合い、その発達と教育を考える中で発達理論の重要なエッセンスを創り上げました。

この二人の先達の理論にはじめてふれたのは学部生のときです。以来何度も出会い直し、そのたびに目を開かれてきました。まだすべて理解できているわけではなく、これからも折にふれて出会い直し、学び直していくことでしょう。

本書は5つの章から構成されています。第1章では基本的な発達の考え方を、第2章から第4章は時間軸に沿って発達の姿を述べています。第5章は単行本化にあたって新たに書き下ろしました。「発達とは何か」について、いまの時点での自分なりの答えが残せていたら嬉しいです。